巻頭言

教育訓練の場として

消防大学校長　横山　忠弘

消防大学校長に就任して３か月余りが経ちました。約10年ぶりの消防庁勤務であり、当時も消防大学校へは講師としてたびたび足を運んでいたので、懐かしさを感じながらスタートし、まだわずかの期間ですが、幹部科を始め３つの専科、消防団長科合計５科の卒業を見届けました。どの学科の卒業生も、達成感や充実感そして開放感を露わにしつつ、幾人かは感極まった表情を隠そうとせず、そして築き上げた仲間どうしの絆を財産に、それぞれの所属本部や地元に戻っていきました。（いつもながらであろう）こうした光景を眺めていると、消防職団員の方々の堅固な使命感とともに、この教育訓練の場が果たすべき役割をあらためて意識する次第です。

消防大学校は昭和23年４月に、所長以下７人で創設された消防講習所を前身としています。戦後自治体消防制度の発足と併せて、指導者養成等のための教育訓練機関が早くも設置されたというのも、今振り返ると素直な驚きですが、昭和30年代に入ると多くの消防関係者から更に高度の教育訓練機関の設置を求める声が高まり、昭和34年４月に現在の消防大学校が設立（講習所の昇格）されその思いが結実しました。ここに至るまでの先人の熱意と努力については言うまでもありませんが、地域住民の安心・安全を担う消防職団員にとって、全国レベルでの幹部教育を担う機関がなくてはならないものだという認識が、当時から共有されていたことをしっかりと頭に留めて置くべきだと思います。

こうした歴史も継承しつつ、本校では社会構造の変化や災害発生に伴う課題、消防行政の進展に対応しながら、学科や教育訓練内容の不断の検証と見直しを行っています。また、近年の各地方自治体における職員の大量退職等による年代構成の変化は、消防職においても例外ではなく、さらに東日本大震災以降の複雑多様化する災害や諸事案に適切に対処していくためには、本校の教育訓練体系はいかにあるべきかについて検討を行ったところです。

具体的な方策としては、①大量退職・幹部昇任の動きが収束していく中での、若手への指導力の強化や指揮能力の向上等幹部教育の質的充実、②緊急消防援助隊6000隊増強に応じた、指揮能力や関係機関との調整能力を高める教育訓練の充実、③オリンピック・パラリンピック東京大会開催等を見据えた大規模イベント対策の充実強化、④女性の活躍推進のため、女性専用コースの開設や幹部の意識改革を進める教育の実施、⑤実戦経験の不足を補うため、実火災体験型など実践的な教育訓練の導入、⑥e-ラーニングの更なる導入推進等教育手法の充実、を着実に進めていくこととしています。

本年も幾多の地震、水害に見舞われています。災害現場で献身的に活動する消防職団員の姿を目にするたびに、安全管理の徹底を第一とした常日頃の教育訓練と、個々の部隊組織の責任者の任務の重要性を強く感じます。引き続き全国の消防職団員の期待にこたえ得る消防大学校を目指してまいります。